

強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。深夜に自宅でこの原稿を書きながら、ふと外に目をやると秋の長雨。本格的な秋がやってきましたね。高3生は言うまでもなく受験に向けていよいよといった感じですが、実はこの時期が大切なのは高2生かもしれません。

そろそろ大学・学部について考え始めたり、自分の実力に不安を感じたり、それでも受験まではまだ時間があって、つつい遊んでしまったり…高2の秋は一番不安定で、一番悩みの多い時期かもしれませんね。しかし、この原稿を読んでいる高2生の諸君、是非この時期に悩み苦しんでほしい。悩み苦しむ自分を肯定してほしい。そして、そこから前進する術を自分なりに見つけておいてほしい。目先の勉強も大切ですが、如何に自分を成長させるか、どうやって自分を伸ばしてゆくのか。この秋の夜長、少しそんなことを考えてもらえたらと思います。

さて、それではそろそろ解説をはじめていきましょう。みなさん、どのような解答が仕上がりましたか？今回取り上げた東大日本史の第3問は院内銀山を中心として江戸初期の社会経済を考える問題でした。問題の系統としては前回取り上げた第2問と同様ですが、「院内銀山」「山師」「鉱山町」など教科書ではあまり取り上げられない用語が散見され、さてどうしたものかと二の足を踏んだかもしれません。

しかし、難易度の高い問題ほど東大は問題の資料文に多くのヒントを隠してくれています。ですので、資料文を忠実に、注意深く分析していくことで解答が得られるはず。では早速、資料文を読み進めながら、問題を捉えていきましょう。

<江戸初期の鉱山町からみえること>

(1) 17世紀前半の出羽国の院内銀山

資料文(1)

1607年に開かれ、秋田藩の直轄となった院内銀山では、開山して数年で、城下町久保田（現在の秋田市）に並ぶ約1万人の人口をもつ鉱山町が山中に形成された。

資料文(1)では、問題のテーマとなる院内銀山の概要が記されています。ここで読み取れることは院内銀山という鉱山町が城下町久保田と並ぶ1万人の人口を有していたこと、つまり**城下町と同等の規模をもつ消費都市であった**ということです。

資料文(2)

鉱山町の住民の出身地をみると、藩に運上を納めて鉱山経営を請け負った山師は、大坂・京都を含む畿内、北陸、中国地方の割合が高く、精錬を行う職人は、石見国など中国地方の出身者が多かった。一方、鉱石の運搬などの単純労働に従事した者は、秋田領内とその近国の割合が高かった。

資料文(2)では鉱山町の住民とその出身地について書かれています。少しまとめてみると、

- ①藩に運上を納めて鉱山経営を請け負った山師
出身地：大阪・京都を含む畿内、北陸、中国地方
- ②精錬を行う職人
出身地：石見国など中国地方の出身者
- ③鉱石の運搬など単純労働に従事した者
出身地：秋田領内とその近国

ここで①～③についてももう少し分析を進めていきましょう。まず①の「山師」とは一体どのような人々

強者の戦略

だったのでしょうか？ここでいう山師が「ペテン師」の意味でないことは明らかですが…（ちなみに山師がペテン師の代名詞になったのは近代後期のことのようにです）。しかし、ここは「山師」が何であるかという知識がなくてもある程度推測することが可能ですね。つまり、資料文に「山師」とは「藩に運上を納めて鉱山経営を請け負った」人々であるとして書いてあるのですから。そこから考えると、まず藩に対して運上を納めることのできる**資本力を持つ人々**であること、そして、鉱山経営を請け負ったことから**経営能力に長けている人々**であったことが分かります。ちなみに『日本の鉱山文化 絵図が語る暮らしと技術』（国立科学博物館、1996年）に収録されている村上安正「江戸時代の鉱山開発」によると山師とは「鉱山を発見し、鉱山の開発を行った技術者兼経営者。鉱山は総合的な産業であるから、当時の最高の頭脳と人心把握力、政治力および経営手腕が求められた」とあり、資料文の記述と符合しています。

次に②の「精錬を行う職人」について考えていきましょう。まず、「精錬」とは何かを知っている人は少なかったと思いますが、それでも③の「鉱石の運搬など単純労働に従事した者」と分けて考えられていることから、「精錬」が鉱山における「単純労働」ではないことは読み取れますね。つまり、「精錬」は**知識や経験、それに特殊な技能・技術を要するもの**であったということが推察できます。ちなみに精錬を辞書で引いてみると「鉱石から目的とする金属を分離・抽出し、精製して鑄造・鍛造・圧延用の地金とすること」とあり、やはり知識と技能を必要とするものであることが確認できます。

③の「鉱石の運搬など単純労働に従事した者」はこのままの理解で十分でしょう。ちなみに前掲論文では「近世の日本の鉱山では、それに関わる労働力のうち坑内で働く坑夫が大多数を占めていた。彼等は堀大工と呼ばれる直接採鉱に従事する者が主体で、手子あるいは負子と呼ばれるものがその補助労働を

担っている」と紹介されています。

さて、次に考えなければならないのは①～③の出身地の差異は何を原因として生じているのかという点ですね。そのため、まずは資料文に登場する、畿内、北陸、中国地方がそれぞれどのような特色を持った地域であるのかを考えなければいけません。

大阪・京都を含む畿内：いうまでもなく経済の先進地域。資本を蓄積した豪商が多く存在したと考えられます。

北陸地方：江戸時代の初期という時期から、既に日本海を中心に廻船業が営まれており、その経営を行うことで資本を蓄積した豪商が存在した地域と考えられます。

中国地方：石見国には大森銀山、但馬国には生野銀山というように、既に盛んに開発されている銀山が存在している地域です。つまりそれらの銀山では「山師」や「精錬を行う職人」が多く活躍していたと考えられます。

以上、資料文(1)(2)をみてきましたが、ここで設問Aの解答を作成しておきましょう。

〔設問A〕

鉱山町の住民のうち、山師と精錬を行う職人の出身地にそれぞれ上記のような特徴がみられたのはなぜか。3行以内で述べなさい。

【解答例】設問A

資本力と経営能力が必要な山師は商業や廻船業が発達し、鉱山開発の進む畿内・北陸・中国地方の豪商が多く、精錬の特殊な技能を必要とする職人は、既に銀山開発の進む中国地方出身者が多かった。(90字)

強者の戦略

(2) 院内銀山と藩内の経済

それでは、引き続き資料文の分析を行っていきましょう。

資料文(3)

鉾山町では、藩が領内の相場より高い価格で独占的に年貢米を販売しており、それによる藩の収入は、山師などが納める運上の額を上回っていた。

「鉾山町では、藩が領内の相場より高い価格で独占的に年貢米を販売」という一文から、**藩が自ら年貢米の価格調整を行うことができていた**事実がわかり、また「それによる藩の収入は、山師などが納める運上の額を上回っていた」の一文からは、藩にとって**鉾山町は鉾山資源の開発による利益だけではなく、米相場の調整による利益をあげることできる存在**であったことが読み取れます。ちなみにこのように藩が年貢米を販売する背景には、幕藩領主が石高制のもと年貢の米納を収入の基本としていながら、その一方で都市（城下町）では商業の発展に伴う貨幣経済の浸透が進んでいるために、都市（城下町）を中心に支配を行う幕藩領主にとって貨幣の入手が不可欠である事情があったということがあります。同様の事情で、藩が蔵屋敷を大坂（もしくは江戸）において、領内の年貢米や特産物である蔵物を蔵元・掛屋とよばれる商人を通じて販売し、貨幣の獲得につとめていたことは、教科書からも読み取れる範囲だと思います。

資料文(4)

当時、藩が上方で年貢米を売り払うためには、輸送に水路と陸路を併用したので、積替えの手間がかかり、費用もかさんだ。

まず気をつけたいのは「当時」という言葉です。何気なく読み飛ばしてしまいそうになりますが、東

大の問題（資料）には“過不足”がないのが特徴です。しっかりと読み取りたいところです。ここでいう「当時」は「17世紀前半」を指します。つまり、川村瑞賢が西廻り航路を開発する（1672年）以前のことであり、出羽国から大坂までを直接結ぶ航路が整備されておらず、そのため「輸送に水路と陸路を併用」し、手間と費用がかかったのです。

以上、資料文(3)(4)をみてきましたが、ここで設問Bの解答を作成しておきましょう。

〔設問B〕

秋田藩にとって、鉾山町のような人口の多い都市を領内にもつことはどのような利点があったか。2行以内で述べなさい。

【解答例】設問B

西廻り航路が未整備な当時、上方への廻米より費用をかけず年貢米の換金が行えるだけでなく、自藩での価格調整が可能であった。(59字)

今回の問題は一般的には藩が年貢米を大坂（もしくは江戸）の蔵屋敷へ廻米し、それを換金することで藩財政を成立させているという教科書レベルの理解を前提に、院内銀山という普段は注目しない地点に焦点をあてることで、江戸初期の経済・流通を多角的に考えさせるという、“さすが東大”と言わしめる問題でしたね。このように考えれば、例えば西廻り航路・東廻り航路の整備が大坂・江戸の都市圏だけでなく、地方都市のあり方にも大きな影響を与えたことが容易に想像され、歴史の捉え方を多面的かつ幅を持ったものにすることができます。“歴史を捉える力”を試したいという東大日本史の作問者のメッセージが伝わってくるようですよ。

さて、いつものように論述問題の解答はもちろん一つではありません。「これはどうだろうか?」「こ

強者の戦略

れではだめなのか？」と自分では判断がつかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！

<参考文献>

『日本の鉱山文化 絵図が語る暮らしと技術』(国立科学博物館、1996年) 村上安正「江戸時代の鉱山開発」